

特集

②

「期待のルーキー」

中大を踏み台に、 世界へ羽ばたけ!

撃て、精密機械のように。
走れ、カモシカのように。
泳げ、トビウオのように。

こしも将来を嘱望されるスポーツ選手が、数多く入学した。いずれも高校トップの輝かしい経歴を誇り、中央大学を飛躍の踏み台に選んだアスリートたち。そのなかから射撃部、女子陸上競技部、水泳部の3選手取材した。普段着でのインタビュー。3選手とも一見は、ごく普通の大学1年生だった。物静かでおっとり。さわやかな笑顔がフレッシュだ。だが、競技の話になると「勝利」への燃え立つ闘志をみせた。大いなる自信があるからだろう。ますます期待が膨らんだ。目指すは大学No.1、日本一、そして世界へ!



夢ではなない

北京オリンピック

“沈着冷静”が似合う、
その素顔

射撃部 山下理貴さん(文学部1年)

「来年の北京オリンピックに出たい」。初対面の記者に表情も変えずにサラッと大きな抱負を述べた。

端整な顔立ちに、細身な身体。穏やかで、受け答えも物静か。その彼は、一見とはとても想像がつかない実力者だった。なんと2005年に全日本ライフル射撃競技選手権大会で優勝をしているのだ。山下理貴さん(文・人文社会学科社会学専攻)がその人。

取材に行つてまず驚いた。練習場所である射撃場は室内にあったのだ。ドアを開けると、10m用と50m用の練習場が両サイドにある。片側の50m用の部屋では、2人の女子部員がパソコンと向き合っているところだった。

「この部屋では実際に弾は出せないで、パソ

コンを使ってシュミレーションするといった感じ
です。弾を出せるのは埼玉の射撃場に行って練習
をするときと大会本番だけです。ここでの練習は
実射とはやっぱり違ってきますね」

弾を出さないで体に衝撃を感じることがない
からだ、という。

反対側の10m用の練習場では、実際に弾を撃つ
ことが可能だ。ライフルの競技姿勢には立射、膝

射、伏射があるが、山下さんの専門は
10mエア・ライフル、立射。これは60
発600点満点で勝敗が決まる。

精密度を徹底して要求される。どれ
だけ正確に弾を当てられるか、または
どれだけ正確に同じことができるかの
戦いだ。彼が全国優勝をしたのもこの
競技。立射という不安定な姿勢で銃を
コントロールする。

「北京オリンピックに出場するため
には、9月に行われる日本代表を決定
する予選で593点を2回、それから
その先のアジア選手権で595点を出
せばなんとか・・・」と語る。彼の最
高得点は594点。北京出場も夢では
ないのだ。

実際に何発か撃ってもらった。体の
揺れを少なくするために硬い上着やズ
ボンを身に着け、ガチガチに固定する。
靴の底も安定を保つために真っ平らだ。

射撃用のめがねをかけ、ようやく準備完了。真剣
な表情で銃を握る。この銃、なんと4.8キロ。記者
も握らせてもらったが、持ち上げるのに精一杯で
フラフラ。

標的は0.5ミリ

狙う標的はあまりにも小さくて目を疑った。真
ん中に当たると10点だが、的の中の10点の大きさ
は0.5ミリと大変小さい。実際に10メートルも離れ
ていては、裸眼で確認することはできないのである。
穴から覗き、銃の枠と標的の的を重ね、そして撃つ。
「体力というより、集中力が必要ですね。夏場
は暑くなって切れやすいんですけど」

肉體トレーニングもしているのかと思いきや、
意外な答えが返ってきた。

「トレーニングは重要なんですけど、僕は・・・
あんまりしてないですね。最近お腹のたるみ気が
なるので腹筋をちょっとやっっているくらい」と
笑う。やはり必要なのは基礎体力と集中力。高校
の頃はコーチに勧められ座禅も組んだことがある
とか。「最初は寝ちゃいましたけどね、だんだん
慣れてきましたよ」。どうりで「沈着冷静」とい
うことが似合うわけだ。

そんな彼、中学までは野球少年だった。彼の射



瞬間、鼓動が止まる！



素顔は、はにかみや！

たつが、彼の頑張れる理由だろう。そして石川県から応援してくれる両親の存在も忘れられない。「でも大会には呼びません。国体だけは呼びましたけど、やっぱり恥ずかしかったです」と苦笑い。高校生の山下さんが浮かんできた。

親から離れての寮生活はやはりきつそうだ。門限は23時。遊びたい、と本音が漏れる。「まだ慣れないっていうのもあるんですけど、寮にはあんまりいたくなくて。なのですぐに布団に入って、朝6時半には起きて部屋を出ます」。どこに行くかは・・・秘密でことデネ。

撃の才能が開花し始めたのは高校1年生のとき。「楽しそう！」と射撃部を体験したのがきっかけだ。「高1のとき、大会でいい結果が出て、あ、イケルかもしれないって思ったんですよ」とはにかむ。冷静な彼だが微笑んだ表情がとても可愛らしい。

石川県金沢辰巳丘高校の射撃部の部長として部をまとめた山下さん。2006年には世界選手権国内選考会でも優勝を勝ち取った。

両親の応援が支え

「とにかく射撃をしていて『楽しい』って気持ち、そして『上を目指そう』って気持ち大きいです」。単純なようで実はイチバン難しいこのふ

「でも自分でお弁当作ったりもするようにになりましたよ。おにぎりと、きんぴらなんかも。意外と料理するんですよ」

射撃場を離れると、大学1年生の素顔の山下さんがどんどん見えてきた。しかし、「いずれは高校の教師になって、射撃部の顧問になりたい」と将来もしっかり見据えている。

彼の中に「下を向く」という言葉はない。今まさに輝いている期待のルーキーだ。

(学生記者 山崎綾香 II 法学部3年)

悔しさをバネに 記録伸ばす

持ち味生かす

400mH

女子陸上競技部 田子雅さん(法学部1年)

「もっとチームに貢献できる結果が出せた方が良かったなと思います」

大学生になって初めてのビッグな大会、関東学生陸上競技対抗選手権大会(国立競技場で5月12、13、19、20日開催)の結果についての田子さんの感想である。インタビュしたのは大会直後の5月21日。ホッとしたのか、田子さんは終始、にこやかな表情で応じてくれた。

俗に言う関東インカレ。関東の大学では最も大きな大会だ。この大会で田子さんは、初出場ながら400mハードルで3位、400mで2位、4×400mリレーで4位という好成績で、見事にデビュー戦を飾った。

しかし、田子さんの口から出てくるのは、チームを思う言葉。なんとも謙虚な。

陸上競技というと個人競技のように思われがちだが、関東インカレは大学別対抗戦でもあり、団体競技としての色合いが濃い。1年生ながら、これだけチームのことを思いやるのは、中大女子陸上競技部の部員同士の仲の良さからくるものだということが、話を聞くうちにわかってきた。

田子さんは高校時代からすでにその才能を発揮し、400mハードルでインターハイ優勝、国体でも少年A（20歳以下）で優勝と2冠を達成し、高校界で輝かしい記録を残した。そんな才能あふれた田子さんだが、意外にも陸上を始めたきっかけは友人からの誘いだった。

「途中でイヤになったらやめていいから。そう

いわれて、じゃあやってみようかなと思っただけです」

元タリレーのメンバーに選ばれるなど足は速かったというが、陸上を本格的に始めるようになったから田子さんの才能はみるみる花開くことになる。

持久力を生かす

中学3年の春、200mで全国大会まであと一歩というところまでのぼりつめた。だが、思わぬ挫折を味わった。風の影響によりその時の記録は参考記録となってしまう、全国大会への切符を逃してしまったのである。

「悔しかったですね。もう陸上をやめようかと思いました。でもその悔しさがバネになったからこそ陸上を続けられた気がします。」

このとき田子さんは、大いなる活躍への第一歩を踏み出したのである。

高校に入り、「スタートが、うまくないんですよ」というわけで、田子さんは持久力があることを認められ、400mに種目を切り替え、練習を積み重ねていった。



ハードルを使ってストレッチ

しかし、思うようにタイムが伸びない。2度目の挫折だ。

この時、高校の先生がある提案をしてくれた。「ハードルをやってみないか？ ハードルなら歩数を合わせる必要もあつてフォームの改善にもなる」。これが、400mハードルとの出会いである。

田子さんは後半に伸びる走りの特徴だ。本来、400mおよび800mは高速ながら長い距離を走るといって最も苦しい種目であり、中でも400mハードルは最後まで苦しい中でも障害を飛び越えなければならぬという、とても過酷な種目である。そのため、後半いかに体力を持続できるかが勝負の鍵となってくる。



さわやかな笑顔



自分をみつめ、黙々と練習

そんな種目であるにもかかわらず、田子さんの走りは見ていて気持ちがいいほど後半が強い。他の選手のスピードが落ちてくる中、逆に田子さんはどんどんスピードが増してくる。その持ち味を活かすには400mという距離がちょうど良いようだ。

「好き嫌い」と得意不得意は違いますね。苦しいですけど、私は400mが得意ですから。200mなどの短い距離にしてしまうと、自分の実力を

出し切る前にレースが終わってしまっうんです」

そんなルーキー田子さんがなんで、中大に？

「高校の顧問の先生から勧められたんです。中央大学で監督をしている高橋さんという方が非常に良い先生だと聞きまして。実際に大学を決める前に一度見学にも行きまして、自分の目で確かめてから中央大学に決めました」

さすが、しっかりしている。実際に高橋賢作監督と接してみてどうですか？

「思ったよりもあまり話さない方でした。寡黙な先生ですな」

では高校と大学ではどんな所が違いますか？

「監督は私たち選手を信頼してくれていて、基本的に大会時のアップなどは個人に任せられています。これはほんの一例ですが、このように選手に任せられる部分が多くなったことが1番大きいかもしれませんね」

そして迎えた関東インカレ。各大学の応援が華々しく、それに戸惑いを感じながらも田子さんは専門の400mハードルで自己新記録を出し、3位入賞を果たした。表彰台にのぼると、仲間の部員が表彰台まで駆けつけ、写真を撮る姿が見られた。でも待って、田子さん、あの時、ピースサインの手が逆向きになっていませんか？

中大のマークをネイルに

「陸上部の先輩が、部員みんなの左手中指に、白地に赤で中大のマークをネイルしてくれたんです。もちろん監督にも(笑)。なので、写真を撮ってもらうときにはわざとネイルが写るように逆にしたんです」

なるほど。仲のよいこと。

そんな田子さんに今度は、同じ400mハードルの男子日本記録保持者の為末大選手について聞いてみた。

「私、為末選手にお会いしたことがあるんです。ある大会で、Tシャツなどを売っているところで、Tシャツ買ったらサインしてもらえますか？とお願いして、Tシャツにサインしてもらったんです。いまでもそのTシャツは着ないでタンスに大事にしまっています。そのときに思ったのは、意外と普通の人なんだな、ということ。このとき、為末選手は私服だったのですが、もうホントに、普通。速いけど飾らない。そんな人柄に惹かれましたね」

最後に、ライバルについて聞いてみると。

ウーン…と考えながら、「高校生の頃から知っている選手なのですが、1つ上の先輩で、まだ

勝ったことがない選手がいるんです。1度、この選手を抜きたいと思っています。あつ、まだライバルと呼べるほどに私のレベルは達していませんが…」

謙虚な姿を見せながらも、身近に目標を設定し、闘志を燃やす田子さん。一見どこにでもいる普通の大学生だが、ハードルを飛ばせると天下一品！活躍を期待しています！！

(学生記者 橋本奈緒美 II 大学院理工学研究科修士2年)

インカレで首位奪還、そして北京へ

祖母からの お守りを支えに

表紙の人

水泳部 寺西謙一さん (法学部1年)

400m自由形優勝、200m自由形優勝。

2006年8月、大阪のなみはやドームでの日本高校選手権大会(インターハイ)の輝かしい記録である。

大会では緊張しましたか、との質問に、素直に



「はい」と答え、「運がよかっただけ」と謙虚な言葉がかえってきた。「自分よりも良いベストタイムを持っている選手がいたので不安だった」と語るその表情には、記者と同年代の素顔もかいまみえる。

インターハイに向けては、並大抵でない練習をかさねた。毎日8km走り、1万メートル泳いだ。「2年生のときから目標にし、冬に泳ぎこんだ」と力強く語る。その成果が出たのだ。

泳ぎはじめたのは4歳

水泳との出会いは4歳。姉が水泳をしているのを見て、地元のスイミングクラブに通い始めた。

頭角を現すのは早かった。小

学校1年生のときに競泳選手育成プログラムに入り、中学校ではスイミングクラブに週6日も通った。高校では寮に入り、毎日7時からの朝練を続けた。

その精神力には揺るがぬものがあるが、「高校での毎日の練習はつらかった」という。「でも、やっぱり水泳が好きで、楽しいから続けているんですよ。やりきったときとか、やっぱりベストタイムがでたときは嬉しい」。

こう語る寺西君の言葉からは、水泳へのひたむきな情熱が感じられる。

水の中だけではない。自転車に乗るのも好きだ。高校生のときには一番長いときで6時間も友達と自転車で走り続けたという。こんなところにも、好きなことにとことん打ち込む彼の姿勢がでてくる。

「自転車に乗って山のなかに入っていたりとかしていましたね」

活発な男の子だったに違いない。高校は寮生活でテレビもなかったそうだが、それでも生活は楽



北京へ！ に一瞬表情がゆるむ

授業も出なければいけないし、しかも法学部だし、それはそうだよな、と同意。こうした生活が続けるにはしっかりした強い意志が必要だ。目標とする人は、と聞くと、「松田丈志選手（400m自由形他日本記録保持者）です。泳ぎのペース配分が……あつ、でも目標というか、理想です」と、素早く付け加えた。このへんに彼

の謙虚さがでてくる。これからの目標を聞いたら、「インカレで首位奪還」と即答。中央大学は、1994年のインカレで総合優勝を飾ってから、2004年まで11連覇を達成したが、一昨年、昨年ともに準優勝におわっている。

取材した際、寺西君は中央大学水泳部のパーカーを着ていた。そのパーカーには「m a r u d e r」（略奪者）とデザインされた文字があった。水泳部のホームページをのぞくと、そこにもやはりその文字が。その名の通り、インカレ（日本学生選手権水泳大会、9月7〜9日）での優勝をぜひ奪ってきたい。

個人的な目標は「レベルアップです。来年のオリンピック選考会に向けて」と、北京オリンピックを目指して強い意志をのぞかせる。試合には、祖母からのお守りを必ず持つていくそうだ。家族の期待も抱いて試合に挑む。一見、大学1年生の等身大の姿をみせながら、内実は水泳に対し一途な思いを秘めた寺西君ならば、家族ははじめみんなの期待にこたえて泳ぐ日もそう遠くはないだろう。大学生活も、まだ始まったばかり。これからの寺西君に期待しよう。

（学生記者 武田朋美 II 法学部2年）

しかつた。6人部屋の寮で、部屋の真ん中にしきりがあり、それをネットにみたててバレーボールをしたこともあったという話からも、それがうかがえる。「でも、先生に怒られました」と、やんちゃな面もみえた。

大学生活はどうか聞いてみた。「だいぶ慣れました。寮生活も今は楽しいですよ」。

大学でも寮生活で、4年生と2年生の先輩と一緒の3人部屋。朝練は6時半から始まるため、朝ごはんは自分で用意する。何を食べますか一とたずねると、「ご飯と味噌汁」と返ってきた。「一飯

一汁」とは少し質素かなと思う。でも、毎朝のご飯は、前の晩に自分で炊いているということを知くと、きちんとしていて、偉いと感じ入った。

毎朝、2時間半泳ぐ

毎日朝練で、2時間から2時間半泳ぎ、朝から授業がある場合はそれである。午後練も、その週によるが、回数にして週2回から3回は平均してある。ただ、日曜は必ずオフになる。何をしているの、との質問に、「昼まで寝ています」との答え。毎日朝早いし、練習も大変だし、そのうえ